

ています。作業面では、製菓に加え、製パンも始めました。製菓では港区の「みなとくもん」(地元の特産)の認定を受けるなど、製菓・製パンを通して、広く障がい福祉や港育成園の事業を知ってもらう機会を得ました。

一方、日々の生活の張りになる活動として、一泊旅行(北陸方面)や食事会などおおよそひと月に一度の行事を実施し、社会資源を利用して楽しみながら様々な経験となる機会を提供しました。また、ご家族が参加できる春の交流会や東成育成園と共催でのクリスマス会など、ご家族や法人内事業所との交流の場を設けました。

28年度から実施した施設修繕については、2階部分の部屋割りのレイアウトを変更し、よりわかりやすい避難路を確保し、見通しがよくなったことで日常の見守りも容易になり、支援の質の向上につながりました。併せて廊下等の共用部分の床の張替え、壁面塗装、照明をLEDにしたことで明るい印象になりました。また、利用者から要望が多かった1階トイレと汚物処理室の改修、1階作業室のエアコンの取替を行ったことで、より快適に日中活動ができるようになりました。

【港第二育成園】

港第二育成園では、28年度から就労移行支援事業の利用希望者が減少していたため、定員の見直しを行いました。就労移行支援10名、就労継続支援B型30名としましたが、年度途中で就労移行支援事業の在籍者2名が年限を迎え、その後の新規の利用希望がありませんでした。一方で就労支援から企業内作業、企業実習と幅広い取り組みを行っている就労継続支援B型には年度途中で3名の新規利用希望がありニーズの高さが伺えました。これらの状況を踏まえ、就労移行支援事業を29年3月末で廃止しました。従って、29年度からは就労継続支援B型を40名定員の単独事業所として経営する予定としています。

就労移行支援事業では、事業所内だけではなく、支援者付のグループ実習として、メープルや福島育成園の清掃、エルチャレンジの受託などにも積極的に取り組み、利用者の就労意欲を高める工夫をしました。また、個別面談では、利用者のもつ強みを評価しご本人・ご家族にも自信を持っていただき、職種選定等の目標設定を行いました。

一方、就労継続支援B型では、事業所内作業の充実、工賃の向上にとどまらず、利用者の様々な形態の『働きたい』というニーズに応えるためグループ実習、企

業内体験実習支援の充実に努めました。また、希望が挙げれば企業就労への支援も積極的に行いました。特に働きやすい環境整備、情報提供を心がけ、利用者の持っている力を最大限に発揮できるよう支援しました。そのような中でも、毎月1回の事業所外で余暇活動を実施するなど、働く意欲が維持できるよう、メリハリのある活動を組み立てました。

【ワークスいけじま】

ワークスいけじまでは、就労継続支援B型を定員20名で行っており、年度当初は16名でスタートをしました。年度内に2名が新規利用をされましたが、2名が退所されたため、年度末での利用者数は16名となりました。

退所された2名は、いずれも在籍が1年程度で、1名が再就職、1名が就労継続支援A型事業所に移行しました。ワークスいけじまで働く意欲が高まり、次の新たなステップに進まれたことは、新しい利用のあり方と考えています。

利用者の平均年齢は51.8歳で、最高齢は67歳、最年少は41歳です。40代・50代が中心で、若い頃に比べれば体力面での低下はありますが、就労経験のある方が多く、意欲・能力ともにまだまだ高い状態です。一人ひとりに合った内容とペースで作業を提供することで、利用者それぞれに、やりがいを得られる場となっています。また、年齢が若く就職を希望する利用者も在籍しており、「働く」意識の高い雰囲気の中で作業することで、就職に向けた心がまえも育ちつつあります。

一方で利用者の健康保持も大切であることから、健康増進に向けて、雨天時以外は朝と夕方に事業所周辺のウォーキングを実施し、日課の始まる前にはラジオ体操・ストレッチに取り組みました。また、1年にメリハリを付けるため、行事として、ミュージカル観劇、法人運動会や育成会大会への参加、忘年会や慰労会を行いました。しかし、経済的な負担が難しい利用者が多いことから、行事は年々縮小傾向にあります。一方、みんなと楽しみたいというニーズもあり、今後は経済的に負担が少なく、楽しめる活動を企画する必要があります。

【メープル】

メープルでは、グループホームを44名定員で実施しています。7月末で1名退所されたため、現在43名が港区内の9ヶ所の住居で暮らしています。利用者